

示唆された。

35. 分子シャペロン・カルネキシンの解析

岡崎靖史 (千大)

未熟胸腺細胞では、本来小胞体に局在するカルネキシンが pre TCR, CD3 と会合して細胞表面へ輸送され、前駆受容体を形成することが知られている。今回カルネキシンの細胞表面への発現が、成熟 T 細胞や他の多くの細胞にも共通して起こっている現象であることを見出した。その発現率は全体の数%であり、多くの細胞では糖タンパク非依存性に発現しており、未熟胸腺細胞でみられる糖タンパク結合型の発現とは異なるものであった。

36. *E. Coli*. UPRTとHSV-TK の融合酵素 (UT) を用いた食道癌の遺伝子治療

清水孝徳 (千大)

E. Coli UPRT 及び HSV-TK の融合酵素 (UT) を組み込んだアデノウィルスベクターを作成しヒト食道癌細胞に UT を導入したところ、5FU 及び ganciclovir に対する感受性がそれぞれ上昇し、この 2 剤には相加効果が認められた。また両薬剤に Bystander effect が確認できた。ヌードマウスの皮下腫瘍の治療モデルでは、ベクターの腫瘍内注射と薬剤の腹腔内投与にて腫瘍縮小効果が得られた。

37. 膵島移植におけるマトリックスの生着促進効果に関する研究

高橋進一郎 (千大)

膵島移植は、糖尿病に対する理論的に優れた内分泌補充療法であり、欧米において臨床応用されている。

しかし、移植後 2 週間以内の acute graft failure が約半数と高率であり、移植後の膵島の生着の困難さを示している。そこで VEGF コラーゲンマトリックスを用い、移植膵島生着促進効果について研究を行った。VEGF による血管新生促進、コラーゲンマトリックスによる膵島の構築保持により、移植膵島の良好な生着が得られた。

38. サイトカイン遺伝子導入細胞による免疫遺伝子治療の検討

田崎健太郎 (千大)

マウス結腸癌細胞に各種サイトカイン遺伝子を導入し、次の項目を検討した。1) 皮下に移植したサイトカイン産生腫瘍を拒絶するか。2) その細胞の投与経路/量により抗腫瘍効果の差はあるか。3) 腫瘍抗原特異的免疫の獲得はあるか。4) 抗腫瘍効果をもたらす免疫担当細胞はなにか。5) 免疫遺伝子治療におけるベストサイトカインはなにか。これらの結果より新たな知見を得て、そこで免疫遺伝子治療の可能性を報告する。

39. 乳癌において高発現を示す遺伝子のプロモーター領域の解析とそれを用いた遺伝子治療の可能性

前田智子 (千大)

進行乳癌に対する遺伝子治療を目的とし、乳癌に高発現を示す erbB-2 と Midkine について検討した。ヒト乳癌細胞株において erbB-2 は 10 細胞株中すべての細胞株に、Midkine は 6 細胞株に発現を認めた。さらに、すべての乳癌細胞株で erbB-2 と Midkine のプロモーター活性が認められた。乳癌の遺伝子治療に有用なプロモーター領域の解析を行い、それらを用いた遺伝子治療の可能性について検討した。